熊本大学教育学部紀要、第六八号、三〇二―二九一、二〇一九

日本篆刻家の研究

― 山田正平における東京学芸大学での「篆書・篆刻」の講義に関する一考察 ―

神野雄二

一　はじめに

かつて筆者は、現代を代表する篆刻家である山田正平（一八九九～一九六二）についての調査、研究の一環として「山田正平における教育者的側面―東京学芸大学における「篆書・篆刻」の講義を通して―」(1)と題して執筆した。（『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―』熊日出版、二〇一七年）(2)。初出は「山田正平における教育者的側面―東京学芸大学における篆書・篆刻講義を通して―」（『第二三回全日本書写書道教育研究会―北海道大会研究集録―』全書研北海道大会事務局、一九八二年八月二一日）である。正平の講義を受講した学生に、アンケートを依頼し、その結果を纏め考察を加えたものである。その中で「提出物に対する講評」について述べた。

正平は、学生が提出した印影とレポートに対して講評を書いている。その一部が翁の覚え書のノート(3)に残されている。学生によるレポートを書き写し、講評・評価をつけたものである。

正平が東京学芸大学で講じた講義用のノートやちらしなどに書かれたメモは、東京学芸大学書道科同窓会「硯心会」の有志が『山田正平先生篆刻講義ノート』として纏めている。これまでに二回に亘って刊行されている。

本稿では、旧稿の考察を踏まえながら『山田正平先生篆刻講義ノート』の、現物のノートを丁寧に見直すと共に、適宜関連の資料を併せて提示し、彼の教育者としての一面の再考を試みるものである。また、ノートの現物で重要と思われる個所を翻刻紹介し、若干の考察を加える。本来没故者は敬称を略すが、適宜付した。

二　『山田正平先生篆刻講義ノート』概観

ここで『山田正平先生篆刻講義ノート』について改めて触れておきたい。『山田正平先生篆刻講義ノート』は、東京学芸大学書道科同窓会硯心会の有志の手により、昭和三十八年（一九六三）六月二十二日刊行された。

まず「編輯後記」を引く。

草稿は文字どほり、山田先生が御自身の覚へとして書かれたメモであって、その読解、整理、清書には非常に多くの時間と眼とを必要としたが、なほ浅学の故を以て、山田先生の高邁なる意向には及ばず、本意ならずも先生の不朽の名を犯したる所少なからず。ここに山田先生天来の叱声を頂戴し、併せて諸兄の明察を請はんとするものである。

記

○先生の御遺稿と卒業生のノートを基に企画したものであるが、結局先生の御遺稿が主になつたことは心残りである。

○篆刻と云ふ難解な分野であつた事と、至らない知識内の編輯である為に、充分なものが出来なかつたが、稀見の芸術家山田正平先生の追憶と、篆刻研究の一材料となれば幸甚である。

○先生の御遺稿には、無題のものがあつたが、読者の利便を思つて、かりに名を附したものがある。

○先生が引用されたと思はれる漢文については、出来得る限り原本にあたり、及ばずながら読点を附したが、尚諸兄の識見により少補を要する所あらん。

○用字法の仮名遣ひは、原則として旧に由つたが、字体は已　を得づ新旧併用す。

○文中、□の印は先生のノートの終に判読能はざりし箇所なり。

○篆体を以て書かれた字は、後で手写によつて入れたものである。

○山田先生の口述の風は、耳に咄なるものであつたが、今にしてその意の幽深なものであつた事を知る。諸賢その意旨を逸することなく、味読せられたし。

田辺萬平（一九〇三～一九八〇）の「序」は同著出版の事情に触れているので掲げる(4)。

山田正平翁の一周忌が近づく。昨秋来、硯心会委員の手で編輯を続けてゐた翁の遺稿の整理がまとまり、いよいよ印行の運びになつた。一日、平賀・近藤の両君来り、草稿の下見をしてくれといふ。数個所を拾ひ読みして、これは容易ならぬことだと思つた。遺稿といつても、大学書道科での講義ノートである。ノートを見ると、翁自身の心覚えに書き陳ねた短文が多く、中には項目だけのもの、術語だけのもの、古文献だけのもの、引用文と翁の意見とが混線してゐるものがある。これを読者に理解してもらふためには余程手を加へねばならぬ。しかし、手を加へてしまつては、翁の体臭を失ひ、翁の語気を損ずる。読者はこの遺稿の中から翁の論理を知らうとは思ふまい。在りし日の人間山田正平翁に直接触れることができれば、それでよいのではなからうか。さう考へて、極力原文を存しておいた。編輯委員の判断は正しいと思ふ。（後略）

昭和三十八年四月一日　桃李咲き満つる時　田辺萬平識

この中で、原稿の校訂に携わった東京学芸大学名誉教授の伊東寿は「遺稿に学ぶ」と題して、次のように述べる。

（前略）昭和三十一年であつたと記憶するが「僕は話が下手でね、あれで学生に判るだろうか」と漏らされたことがある。専門的で時には飛躍があるので、篆刻に関する一般教養が乏しい学生諸君のうちには了解に苦しむ点もあつたようだ。しかし大学における芸術教育はそれでも良いのだ。其の芸術の習得は悟道にも通ずるからである。流れる汗を拭きながら訥々と講義をされたあの真剣な温容が今も眼前に浮ぶ。私はこの珠玉の遺稿を手にして自己の無能と不勉強を恥ぢて長嘆息せざるを得なかつた。

二

その後『回顧山田正平―東京学芸大学における教育者としての側面―付篆刻講義ノート（復刻）』（東京学芸大学書道科硯心会　平成十六年七月二十日）として再刊された。

また、平成十五年十一月三日、東京学芸大学において、東京学芸大学書道科同窓会の主催による「山田正平先生を語る」と題するシンポジウムが開催された。杉本淳子、益子明達、小木良一、塚本宏、神野雄二の五名がシンポジストして発表した。

復刻版の編集にあたった岩切誠氏の「あとがき」に、

○山田正平先生の特別展示開催が議題に上ったのは平成十四年三月の硯心会理事会であった。そこで、そのための企画委員会の設置が提案され、承認された。第一回目の企画委員会の集まりは翌十五年三月。以後ほぼ毎月会合を重ね、今日に至った。

○特別展示の目的は東京学芸大学における教育を振り返ることにあり、教えを受けた卒業生の所蔵する添削等を調査・収集することにした。この冊子に収録のものはその一部である。小さな紙片の中にも、山田正平先生の情熱と生真面目さが見えてくる。

○冊子は三部仕立てとした。①特別展示品（の一部）、②シンポジウム、③『篆刻講義ノート』（復刻）の三部である。

○シンポジウムは、当日発表したものである。『篆刻講義ノート』は誤植等、訂正すべき点もあるが、あえてそのまま復刻することにした。

○この冊子が山田正平先生の今後の研究に寄与することを希うものである。

と、再刊の経緯について述べる。

続いて、硯心会会長藏元訓征氏（十二期）の「ごあいさつ　感化―山田正平展に寄せて―」を掲載する。

（前略）山田先生の権量銘のご講義で、今思うに、篆刻の道へ進むか否かという問題ではなく、感化ということで、「教育」というものの原点を見たような気がする。感化には長期的なものもあろうが、瞬時に存在するこ

ともある。理念の模索、追求が大学の場であると指導を受けた自分にとって、この僅か一度の授業参加が現在教職の立場にある身にとって実に重く、考えさせられることとなっている。（後略）

次に、東京学芸大学教授　加藤祐司氏の『山田正平展―教育者としての側面―』によせて』を載せる。

（前略）篆刻家としての山田正平先生はつとに知られているが、教育者としての姿を知る資料はほとんどないと言ってもよい。一般に教育者は、常に学生の〝今ある姿〟をいかして〝あるべき姿〟に変えていくか。あるべき姿へ導くための状況づくり、場（雰囲気）づくりをいかに支援していくかを視座に置いている。「不易流行」ということばがある。（中略）が、山田先生の白墨による板書は、今日なお多くの学生の琴線に触れ、〝あるべき姿〟へと導いてくれている。不易なるものとして書道科の貴重な財産である。（後略）

それに続き、当日開催されたシンポジウムの各発表者の発表骨子を掲載する。

杉本淳子（東京学芸大学書道科五期）「山田正平先生の思い出」

先生は非常に言葉の少ない方で、心の中でよく考えた揚句の果に出てくる珠玉のような言葉を、ポツンポツンと話されます。しかも、学生に話しているのか、御自分に話しておられるのか、天井の方ばかり見て話されたように思います。内容が非常に難しく、私には理解できませんでした。しかし、お話を伺っているうちに、篆刻とは大変な世界なのだ、とんでもないところにこれからは首を突っ込むんだと思いました。

益子明達（同十一期）「百分の中で」

また、会期中に西川寧氏、伏見沖敬氏、四、五人で会場に見えられ、会場を一廻りして帰られる際、保多先生が彼等を引き止められ、メーンの裏側に展示してある写真の所に案内した。先生の指示で後に付いて行った。両氏は頭を上下左右にし、指先で筆跡をたどった後、「山田先生はこのような真摯な姿勢で学生に対応されていたのですね。」と、改めて、保多先生に深々と頭を下げられた。

小木良一（同四期）「文人　山田正平先生」

今日このように山田正平のシンポジウムが開かれるなんてことは、書道界にとっては夜明けがやっときたんじゃないかと思います。真っ暗な書道界でそういうことができるのが学芸大の建学精神だと僕は思っています。

塚本宏（同十一期）「最初で最後の授業」

山田先生には、我々の最初で最後となった授業で、印とはこうやって彫るのだと実際に見せて頂きました。

以上『山田正平先生篆刻講義ノート』と「シンポジウム」から、山田正平の講義の様子が具に窺える。正平が如何に真摯に講義したかが見て取れ、それゆえに学生への感化も大きかったかと思われる。

三　筆者におけるシンポジウムでの発表「印鬼山田正平先生の魅力」

筆者は「シンポジウム」において、シンポジストとして、以下の内容に関して発表した(5)。本研究に関連する内容を多く含むので、再刊された（『〈回顧〉山田正平―東京学芸大学における教育者としての側面―』前掲）より再掲する。幾らか加筆修正を施す。

まず始めに、ここにお見えになられている山田家の皆様には、私、東京学芸大学の学生時代から現在まで三十年に亘り、山田正平先生そして山田寒山についていろいろな調査研究をするに際し、ご配慮御指導頂きました事、心からお礼申し上げます。

私が正平先生について興味を抱く契機となったのは、昭和五十一年新宿にございましたアメミヤ書廊で「第二回一止道人山田正平遺作展」が開催されましたが、この時、担任であられた小木太法先生（書家・東京学芸大学名誉教授）のご紹介で山田家を訪れ、展覧会のお手伝いをさせて頂いた

時です。その後、専攻科の修了論文として、正平先生が学芸大学でどのような講義をされたのか、それは先生にとっては多様な功績の一面かも知れませんが、正平先生の人と芸術を知る上において、幾許かの真実があるのではないかということで、先生の教育者としての業績を調べました。東京学芸大学書道科の卒業生である二期から一一期生の硯心会の先生方にアンケート調査をさせて頂きました。その時に、諸先輩にはさまざまな御指導を賜りました。本日その先輩方も多数お見えになられておられます。ここに伏してお礼申し上げます。有り難うございました。

この度岩切先生からシンポジストのお話を頂きまして、私、正平先生の謦咳に接してはいませんが、研究者としての立場から自分の考えの一端をお話し申し上げたいと思い参加させて頂きました。時間が限られておりますので、四つの観点から、資料を準備致しましたので、それに基づいて説明をさせて頂きます。

まず第一は、正平先生の周辺の人々とその交友です。殆どの先生はお亡くなりになられましたが、西川寧先生、伏見冲敬先生、保多孝三先生、古川悟先生等へのインタビューをまとめさせて頂いたものです。これは『広島文教人間文化』第三号（広島文教人間文化学会、二〇〇三年三月）に発表致しました。

西川先生からは「初世中村蘭台と河井荃廬、そして二世中村蘭台と山田正平は見事な違いがある。以前この両者を比較して、どっちがより以上に芸術家なのかと考え回らせたことがある。ただそれは冗談です」云々というお話を聞かせて頂きました。伏見先生からは「篆刻は文人の仕事であり、正平先生は篆刻を芸術の世界まで引き上げた人でその功績を認める」そういうお話を伺いました。保多先生からは「山田先生の手はごつい手であった。土を掘っている手だ」と伺いました。古川先生からは「正平先生は五〇顆くらいの『模刻印譜』がある。私は漢銅印譜と間違えたくらいのものであった」とお聞きしました。その他実に多くの方にお話を伺いましたが、これは改めて纏めたいと思います。

続いて、第二は、正平先生の教育者としての一面です。学芸大学の教官であられた田邊古邨先生、伊東参州先生は、正平先生を不世出の芸術家であり、教育者としても素晴らしいということで大賞賛しておられました。

四

田邊先生は『山田正平先生篆刻講義ノート』の序文で「翁は秋草道人を敬愛し欽慕し、自分も道人のごとく教育者の道を択べばよかったと言ってゐた。が、過去十年間、二百五十名の学生に与へた感化は真に偉大である。翁は遂に大教育者たることを得て、秋草道人の蹤を追ふたのである」という一文を遺しておられます。伊東先生は「正平先生は週一回の講義のために何日も準備に費やされる」と話され「私はそれを思うと允に恥じ入るばかりである」とおっしゃっておられました。

また、先に述べましたアンケートは「山田正平における教育者的側面―東京学芸大学における篆書・篆刻講義を通して―」との題目で専攻科時代に修論として、更に全書研北海道大会で研究発表させて頂きました。当時受講した学生の皆様は、講義中印象に残った内容として「印は宇宙ですよ」「作家は常に仕事が生命である」などを記憶しておられました。

第三は、正平先生の篆刻制作の過程を載せました。その一例として、「無人華落」の校字、印稿、布字、印影、刻面です。これで正平先生がどういう手順で印を制作されたのか知れるのではないかと思います。次は「撥雲尋道」「游雲魚」の印稿と印影です。いかに正平先生は印の制作で工夫されていたかがわかります。次は久保田大卿先生の雅印で多分完成作前に磨り潰されたと思われる印影、更に「行雲流水」と「清楽」朱白印二種です。これから、正平先生が日頃述べておられた、明の朱簡の印論「刀を使うに筆を使うが如くす」、明の何震の印論「小心落筆、大胆奏刀」、清の魏錫曽の印論「書は印より入り、印は書より出ず」を自ら実践されていた事が理解できます。

第四は、正平先生の篆刻芸術の魅力とその顕彰についてです。まず一つは表現の自由さということが挙げられるのではないかと思います。これは印面構成の妙、空間の特色ということがいえるのかもしれません。疎密の処理を究極まで突き詰めた、そんな感じがしております。

ここに拡大コピーを用意致しました。正平先生の「無人華落」と呉昌碩の「石人子室」です。この両印は日中の近現代篆刻史の代表的な作品になるのではと思います。私、これらをずっと壁にかけて見ていました。どちらが上位に置かれるのでしょうか。一言でいえば、正平先生の方が突き詰めた世界が、疎密の鬩ぎ合いの行き着いたところがあるのではないかと思

います。もちろん呉昌碩の大陸的な大胆さは素晴らしいのですが。何はともあれ一止道人、缶廬は並称されるべき大家と思います。両者ともに、筆意と刀意が融合され、書の個性がそのまま印となって表現されています。まさに鉄筆ということでしょうか。印はやはり書であると語っているようです。更に正平先生は陶印や刻書にも力作がございます。また詩作は少ないですが、東洋古来の四絶の妙境をめざしておられたのでしょう。

山田正平先生の日本篆刻史上の位置付けになりますが、高芙蓉を祖とする芙蓉派の系譜に繋がる、昭和期を代表する不世出の印人ということでしょう。また一止精神ということですが、この事、私は生涯をかけて考えていくことになると思いますが、徹頭徹尾、正平先生は篆刻に命をかけた、つまり一止精神とは一事に命を賭する志をいうのではないかと思います。

最後に、正平先生の顕彰ですが、山田家の皆様がお父様を大切になされてきたこと、それが正平先生を現在に生かしております。もう一つ、これまでどういった正平先生の顕彰がなされてきたかということですが、私かつて年表を数回編みましたが、小木先生他学芸大学関連の先生が中心になされてきています。正平先生の真実の姿を伝えていくには、伝えてゆく人が大切だという感じがしております。来年硯心会が主催して、山田先生の教育者的な面に視点を当て、展覧会を開催致しますが、よい展覧会なることを祈ります。

日本の篆刻史で、高芙蓉を「印聖」、池大雅を「印仙」と呼んでいます。正平先生には何を冠したらよいかとずっと考えています。そこで「印鬼」はどうでしょうか。「鬼」というのは人間わざを超えたすぐれたものを形容します。

私、一止道人山田正平先生は邦人第一の印人と考えて調査研究をしてまいりました。三十年間今もって厭きることはありません。見れば見るほど魅力が増し、これからもずっとライフワークとして研究し続けていこうと思います。正平先生やその他多くの有縁の先生方との墨縁に感謝致します。

本日は本当に有難うございました。

四　篆刻講義ノート現本について

篆刻講義ノートの基となった現物ノートについて紹介する。

1、書誌

原本ノート①（図1）

〈書写年〉一九六三（昭和三八年頃）、一九五六（昭和三一年頃）

〈寸法〉縦二五・〇×横一七・二cm

〈装丁〉七四頁（白紙九頁）

〈表表紙〉（1）歴史（中）（講義要点）

〈裏表紙〉学生答案写し

原本ノート②（図2）

〈書写年〉一九六二（昭和三七年頃）、一九五六（昭和三一年頃）

〈寸法〉縦二四・〇横五×一九・三cm

〈装丁〉九八頁（白紙三四頁・見返し一頁）

〈表表紙〉記載なし

〈裏表紙〉記載なし

2、抄録・考察

ノート①と②の中で、学生のレポートを筆記した箇所を掲げたい。

ノート①の冒頭に「昭和二八年四月開講、七月終了の東京学芸大学に篆刻及び篆書講座を担当しその試験答案の一部也」と書かれており、学生の解答タイトルと氏名、をインクペン書きで書き、鉛筆で評価を付けている。

学生の授業に関わる箇所を抽出する。これにより、授業内容や展開が理解できる。

（1）黒田美枝子（図3）
先生のお人柄に接し得たことは大へん幸福なことでした。

（2）府川次男
水曜日の二、三時間に渡る、篆刻の時間は私にとって特異な心暖まる授業であった、毎時間話される篆刻の歴史また実際に刻まれた印、印譜、等に依り私は今まで無関心であった篆刻の新しい、すばらしい、世界を　知る事が出来たのを幸福に思っています。

（3）太田保一
一日一日と楽しい授業となっていった、お別れとなると寂しいものだ、先生はおらなくても、印の中に先生は常に私のそばにおられるのである。

（4）渡辺好雄
書道を学ぶものに、必要とせらるるもの　筈なのに、講義が始められ時、とけこめない空気が、自分の周囲に満ちていた、その石をすって平らにしてほりこみをする、只ただほる事にのみ重点と考えていた私は、その講義を毎回欠かさずに出席しているうちに、とんでもない、遊び事と、芸の本質と、区別できないなと、自責の念にかりたてられた。

（5）木内光雄
篆刻は本当に職人の技としか考へておりませんでした、しかし自刻にあたり友との比較により、又先生の御講義により、非常に個性的なものであり深淵極まる、蘊奥を有しているのに驚嘆した。

（6）長坂吉和
本年四月まだ桜の散りかけた頃、例の書道教室で僕等は始めて山田正平先生に講義を受けました、級のものも別に用意もなし先生の御話しに全神経を傾聴していました、「石っていうものはいゝものですね、こうしていても何かを語って呉れますね」先づ御話されたのはこの言葉でした、僕はこの言葉を御聞きして何ともいえない微妙な世界に引づり込まれた様な一種いゝようのない気持に

六

なりました、何といふ石か知りませんがきっと支那のいゝ石でせうかしきりに石をなでゝ居られた先生はほんとうに楽しんで居られるのです、そこには何のわだかまりもない先生と石といふ世界ですね講義なんて堅苦しいものでなく道に生きられる楽しさを泌みじみ味わえる様な境地です、（中略）ある日の講義の時に先生の画帳が風呂敷からのぞいていましたがその中には僕達をびっくりさせる様な、水彩の畫が描いてありました、小川芋銭先生から御指導を受けられたと後から聞きましたが先生の奥行きの深い一面だと思いました、篆刻の学問の講義歴史的の御話毎週沢山の蔵書をお持ちになり意義深い御話が續きました、その合間に實際刀をとって石に向はわれる先生の御姿は僕等学生に深い感鳴を与へました、刀を掘り、全力を注ぐ、一點一畫に精魂を打ち込まれています、藝の道の厳しさを感じます

（7）島田正治
この一学期を通じ、先生の授業は自分にとっては実に楽しいものでした、中略私は先生刻される状態といふものはそれこそ実に尊い境地ではないかと窃に考へていましたが私の愚かな思索も全くその通りで作品製作の態度はあの楊でなければ本當でないとつくづく思いました。

（8）中村直之
私に取って篆刻は本當に新しい試みであった、新しい物への憧れと次ゝ二解ってくる篆刻の世界が極めて楽しく素晴しく思へた正気印譜を見た時少驚いた私が印を刻して来る毎に良く見て章法字法について御注意して下された先生が終り頃には「澤山刻せば解ります」と云って一々見て下さらなかったと言ふ事が、今の私には極めて嬉しく感じられる唯刻れば良い、刻れば自然に解る、これが私に与へられた今後の篆刻の道なのだ私は何も云ふ事も書くことも出来ないが、強くこの事を感じたので書いて見た。

（9）大塚長榮
最初に授業を受けた時、先生が言はれた話の中に「私は殷の時代ニ遊んでいますよハハゝ」といわれた言葉がいまだに私の脳裏ニ残っていてさすが芸術家だと心を打たれた（中略）こゝに何時間かの篆刻の時間を通して顧るときいまま

での篆刻観が恥すべきものであったことを知る（中略）一つの貧弱の模刻のみを提出するに終ってしまったがつたないながらまずしいながら篆刻を通して目に見えない収穫を得た事は嬉しい。

（10）石井正治
先生の篆書と作品を直して頂いた事により一点一畫がたゝの線でない事か判った。篆書をよくせねばならぬと覚った。

（11）谷　健
十程刻したか思ふ様ニ出来ぬ印影を出さなかった。今度、先生に篆刻を習って十近くほって見たが実際に思ったよりははるかに面白く、その趣きの非常に高雅であることがわかり親しみを持つ様になった。

（12）手島光代
篆刻と一緒に篆書を学ぶことが出来たらと一層興味深かったと思いました。

（13）髙師仁
色、の参考品を見せて貰って自分の摸刻の貧弱をさとる。

（14）川島喜美江
篆刻感したま、篆刻この言葉は今迄の私にとって遠い世界のもの単ニその存在をしるだけの極めて影の薄い対象でしかなかった。しかし篆刻の講義を聞いて顧るとき今迄の篆刻観は恥すべきことであったこと知る。

次に、『山田正平先生篆刻講義ノート』から、正平が受講生に指導した内容を引く。

①　学生に与へる言（二）

○構を雅馴な筆致のもの、屈託のない暢びりしたもの、印にも同じく己に萌芽を見る。
そこで印の観方、作者として自分の想念の標置を古人の言をあげて見る。そしてそれを今の自分に当てはめて見る。
○飛躍
幽玄の位が蘭の位に高まる。或は単なる優美が洒脱といふことに高まる。
○ピカソ、鉄斎の例
疎より密に入り、正より奇に、奇変を尽して正に変へる。法の解釈、各自の特性教養によること。
○印刷印譜
書品に対して書物参考品の見解。
○上代芸術に対しての見解。
○秦代統一時代の変化様相が書道様相変化の縮図。

②　学生に与へる言（三）

篆書練習につき
○近代作家一家につき習ふことを得策とする意見。それより各作家に渉る。
○要は、如何に見るか、解釈するか、意興、いかに感興を生ずるか。
○或人は、手本は見るだけ、直線と曲線の練習、見て習ふこととあり。
○結局その人ならんか。
○説文の解釈に訂正すべき処を近代甲骨文の研究の結果により色々あるが、しかしそれは、百中の一、二と云ふことと考へ、説文の解を一応尊重すべきこと。

③　学生の篆刻感想に対する評

興に乗つて刀を運んで居る処があり一脈爽やかの味があつてよろしい。これは大切なものです。君の言ふ天真爛漫に興味を集中出来ることは極めてよろしい。
更に望むことはよき古典に心を潜めて熟視し分間、布置、の智慧を習得すること
白黒朱の照応関係の考察はよろしい。これがすべて制作に必要な感覚で殊に

絵画など直接この色の墨の適宜なる処置がなければ成立しない。

単に墨一色の絵でも遅速濃淡が適格なる物象心象を表現出来なければ画は成立しない。

白黒のうち五彩ありとも云ふ。

起筆と中辺と終筆そして字、照応しての転折への確かな配慮があつて餘白（この場合は朱の部分が芸となつて生きる。）つまり響きがないと云ふことは餘白が単なる白で無意味で生きて居らないことならん。

あなたが峻厳奔放と見て若しそんなものが模して見たかつたら、更に運筆の使処と力点があり緊密と、どの辺り軽いかを見極めねばならぬ。真の峻厳があつて、真の奔放の妙味も生れやうもの。よき緊密あつてこころよい寛綽も生じて来るでせう。

書も怪であり篆刻も亦怪と云ふ意味ですか。これなれば結構すべて怪で無限の展開疑問があるでせう。そこに歓喜魅力ががあり、更に云へば君の夢が彼方に存在して居るのでせう。つまり怪壱の正体を掴むこと、これ即ち自己の正体を見ることで人間完成に近づくことである。古人の叡智を学び取り、努力することでせうか。

才能がないと自分で思ふのは結構でせう。それを裏返へすと大きな夢があつて、手が伴はないと云ふこと。それなれば才能のあることにもなります。眼高手低と云ふ言葉もあります。穉気元気で体当りして見ることでせう。制作は努力です。

起筆、終筆に注意を喚び起した事は大収穫で、私は思ふ、起筆は一画一字の起りでもあり、また全局の起りであつて全局統合、変化の底を貫くものが存在して居るが如く感ずる。

印を刻すと云ひます。掘るは土の方でせう。印を彫るとも云ひますが多く印判の方に用ひられる。数を多く手懸ける勉強も大切ですが、立派の意図を持つといふことも尤も大事でせう。一応形だけ似た様なものが出来るだけではつまらない。立派な意図それは高い教養を身につけることでせう。書や篆の難しさはそこにある。

八

骨格といつた物は大切なものである。それがあります。芸術家になる為の条件の一項目として無器用をあげて居る。これを云ひ変へると骨格といふことにもなる。しつかりした骨格があつて始めて濃やかの情諏も出て来る。

天真爛漫も結構。素朴も結構。撃術は如何様な底の浅い情感も甘えることは許さない。更によろしい。

技術的の認識は常に大切で観方によれば、芸は表現であるから的確の技術、それに尽きて居るとも云ひうる。しかし表現は結局その人の心象とも云へる。されば心象書の方の品別に神品寄品とか能品とかある。能品的のものに安住せず広くよき参考品により識見を高めて行きたい。

運力のことがやはり一番重要になると私は思ふ。構成の面白さは目につき易いが形を放れて神韻を感得することは運筆運力でせう。文質彬々と云ふ言葉あり。今仮に文を構成とし質を運力運筆と考へても面白い。質、文に勝てば野なりとも云ふ。構成の工夫は学び得らるゝ面。

書も篆刻も形を離れては成立しない芸ですが整つてゐても無味乾燥では芸術の域に入らない。そこで君の言はれる第一印象、これは大切で情感に響くものがある。これが尤も大切でせう。精彩よい言葉ですね。高い情操と広い経験、そして大きく育つのでせう。

完璧に自己の思ふ通りと云ふことは或ひは一生涯出来ぬものかも知れない。自己の意図を充分に貫くことに全力を尽す。それで宜しい。蘇東坡の清語に曰く「璧美なれば何ぞ妨隋」とあり。意図とは（形だけ整つた死物より）完璧でなくとも感興情趣の生彩を主張したのでせう。夢のまぼろしが大切

よき古典によれば自ら進境。

書も篆刻も学ぶ時は第一に形から入ること。表現が即ち芸である。運刀運筆

の力　無限の魅力のある場合もあるが、これはある域に達した後である。先づ分間布置をよき古典により学ぶこと。つまり忠実に叮嚀に形のあり方を学ぶこと。

書の骨格が少し足りない。流暢に見へる篆書でも、やはり楷行草隷と同じく人体の如く、背と肩と両手足とがあつて、そして健康の姿体がなり立つ。

正平が学生に指導した内容、また学生の講義を受講しての感想から、正平の授業内容・態度などが見て取れる。講義そのものは、オーソドックスな方法であるが、授業に向かう姿勢に学生の興味・関心を起こさせる「教育の力」を感じる。これは、きわめて重要な視点を現在に提示していると思われる。

四　おわりに

山田正平が如何に学生を大切にしたか、以下の三つの、謝恩会でのスピーチと「学生に与へる言（一）」から見て取れる。

①学芸大学に第七回の卒業生を送りて
昭和三十四年三月一日
新橋フードセンターに於いて

卒業記念展を銀座画廊に見た。渚氏の熱気をこめた制作を楽しく見た。一般書道展に見らるる意を忘れた徒らなる達者さに嫌悪を覚えるものがあるが、茲には遅拙さはあつても悪達者さはない。会場を二度三度とめぐり前年度の卒業生等と久しぶりに顔を合はせる懐しさもあつて楽しい一時を過した。いまこの席に立つて、諸子に何事か言つて聊かはなむけとしなければならぬが、先きに松本洪、藤原楚水、鈴木梅渓諸先生達の貴重の御話しあつて、更に何を贅せん。只ここに一言、初心忘るべからず。の一句、もち出しこれに更へようと思う。この言葉、相阿彌の花口伝にありとか。先頃何かに散見す。考へるに芸道も人世もすべてこの初心忘るべからずに始まり、またこれに終ると思ふ。

初心とは何か、素心なり。心地潔白なり。心地潔白、そこに美の女神みそなはす。惰性、習慣的、これは芸道への死滅であらう。人間社会もまたこれより汚染せらる。

我が芋銭翁かつて余に教へて曰く。薄氷を履むが如く、深淵に臨むが如しと、画法、芸道に対して心得を説かる。蓋し、初心忘るべからずとそれ揆を一にするものならんか。

いま諸氏、学窓を出て世に立つ。幾多の困難は山積せん。高き嶺に登る、その一歩一歩、忍耐と勇気を以てはじめて望みを達す。初心忘るべからずの裏にあるもの、叡智と精進とは一生の伴侶であらう。

我ことし六十才の誕辰を去るこの二月に迎へ、八十を逾ゆる老先生よりすれば、尚ほ亦小児に似たらんも聊か自らの過去をふりかへり、このことを信じて疑がはぬものがあります。ここに自らの慎言となすとともに、これを以て諸氏へのはなむけとなす所以である。健康に留意して大成せられんことを。

②学芸大卒業謝恩会席上（図4）
昭和三十六年三月三日
銀座明治屋会場にて

清朝乾隆時代の詩人園随園子才の詩話を見ていたら、詩在骨、不在格との文字がふと目に留り、骨と云ふ抽象的の表現が面白く興を引いた。骨にもいろいろあり書道でも骨法、用筆といひ、牛の骨、馬の骨さては鰯の骨も骨、またバツクボーンも、低姿勢も骨の一種であらう。随園の詩在骨、不在格の骨は、気と云ふ字を加へて骨気とすれば判りがいいやうで、つまり無味乾燥の空疎な格調派を風趣とか真気とかを尊ぶべくして空疎の格調を排しなじたものでせうが、これは明治時代和歌や俳句の道に於て論じ尽されたことでもありませうが、しかしこの骨と云ふ抽象的の表現が甚だ面白く感じとつたのでありました。

私も篆刻といふ方寸の世界にとりくんで苦心惨胆なかなか我が家の骨気が貫徹せず、時々豚の骨か鼠の骨などが出て来て嫌でたまらず改め刻したことが幾度もあります。形が少々整はずとも我が家の骨気らしいものが感じられ風通しよしと見られればやつと安心して刀を措くといふ有様です。

私、ことし二月で六十過ぎて、ふたとせ、その上に浅春やとつけて、浅春やわれ六十をすぎてふたとせ、と俳句の形とし笑はれたのですが、浅春やの語感

に強く魅力を覚へてのことでありました。鯉が龍門をはね上り龍となると云ふ語がありますが、私六十を越してなほ一転二転三転、天空を自在にかける真龍飛龍の真随を得んと念願して居ります。

さもあらばあれ私自身この龍の真随を得たりと信じても後世の探索家が地下何メートルかを、掘りかえし、これ龍骨ならず馬なり、牛なりと判断するかも知れぬがこれは関知せぬこと、人の馬牛と呼ぶに任すことです。恵ぐまれた資質を持ち、多くの青春に富む諸君、どうぞ豊富な夢と希望を以つて絢爛の業蹟をつんで下さい。

① 学生に与へる言（一）

諸君は、四ヶ年螢雪の功、空しからず、ここで芽出度く卒業せられ社会に出られる。まことによろこびに堪へない。いまここに我等、謝恩の宴を張り馳走せらる。諸子の酬ゆるの驚きに対し顧みて御つくしするの余りに薄きに非ずやと内心忸怩たるものあり。

私の担当の篆書刻なるもの諸君が書道教育家と云ふ立場からすればこの時間は或は書の歴史の一頁と考へられた人もあらう。さう云ふ見方もなりたつわけであり、しかし私は飽くまで一作家でありて見れば話したり、やつたりすること、篆書、篆刻を如何に見るかと云ふ鑑賞或は創作態度に傾いたかと思ふ。それには知識。物識りと云ふことより、興を喚び起こすことこそ、真の理解となるのでないかと思ふ信念も有した次第であります。

真に物を知ると云ふこと、これは東洋でも或は西洋でも、これはむづかしいこと論議され操り返へされた問題であるらしい。

今後の人生の大展開完成を祈る。この頃、私の少年時代知りあつて、壮年期何かと助力を得た春城老人の八十年の回顧と云ふ本を一寸見ましたが、壮年期の勤勉、壮年期の活躍、最晩期の天命の観し悠々たる心境、実に八十老人よく蠅頭の細字で書いてあつた。

やれる時は大いに奮発と実行する、篆刻でも書でも教育でも、子供を産んで育てることも核心に触れてそれに向かつて努力してもらいたい。

教育がいかに有るべきか、を問う時、一人の偉大なる篆刻家の足跡から学ぶ

一〇

ことは、あまりに多い。

本稿では、『山田正平先生篆刻講義ノート』の、現物を丁寧に見直すと共に、周辺資料を併せて提示し、彼の教育者としての一面を考察した。

山田正平の講義は、講義科目の内容に囚われることなく、芸術・文化・教育などあらゆる方面に亘っており、実に含蓄に富み広範で深長であった。

確かに、正平は篆刻家である。が、学術者・教育者として多面的な顔を持っていると言えよう。中でも教育者として学生や子弟に与えた影響は計り知れないものがある。そういった意味において正平は教育者としても素晴らしい功績を遺したと言えるだろう。正平の述べた「やれる時は大いに奮発と実行する、篆刻でも書でも教育でも、子供を産んで育てることも核心に触れてそれに向かつて努力してもらいたい」（『篆刻講義ノート』学生に与へる言（一））は、今後われわれ教育者が常に考え取り組んでいかねばならない指導者としての本質的な課題と言えよう。

本稿を執筆するに際し、山田家にご配慮いただいた。記してお礼を申し上げる。

【注】

（1）「山田正平における教育者的側面―東京学芸大学における「篆書・篆刻」の講義を通して―」と題して執筆した。東京学芸大学書道科の卒業生である二期から一一期生の硯心会の先生方にアンケートを依頼し、その結果を纏め考察を加えた。

（2）『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―』（熊日出版、二〇一七年三月）。山田寒山・正平に関する実証的・総合的研究書である。

（3）山田家は、正平の講義ノートを含むノート類、講義のためのチラシ切れ端メモ類、散歩や旅行時のスケッチブックなど多くを保存する。同資料はその一つである。

（4）田辺萬平（一九〇三～一九八〇、号古邨、本名萬平、別号は白茅。書道一元會初代会長、東京学芸大學名誉教授。東洋文化研究所所長『田邊古邨全集〈全五巻〉』（芸術新聞社、二〇一五年）他、書道、漢学、短歌などに多くの著作がある。山田正平を東京学芸大学講師として招聘した。

（5）同内容は、シンポジウムで発表したものである。当日は、山田家親族や篆刻研究者、正平が指導した当時の学生など、正平有縁の方々が参集した。

【附記】本稿は、二〇一八年度科学研究費補助金（基盤研究（C）「日本の篆刻に関する実証的研究―歴史・技法・鑑賞の研究から科学的解明を目指して―」課題番号（一八K〇〇一六三）による研究成果の一部である。

【図版】

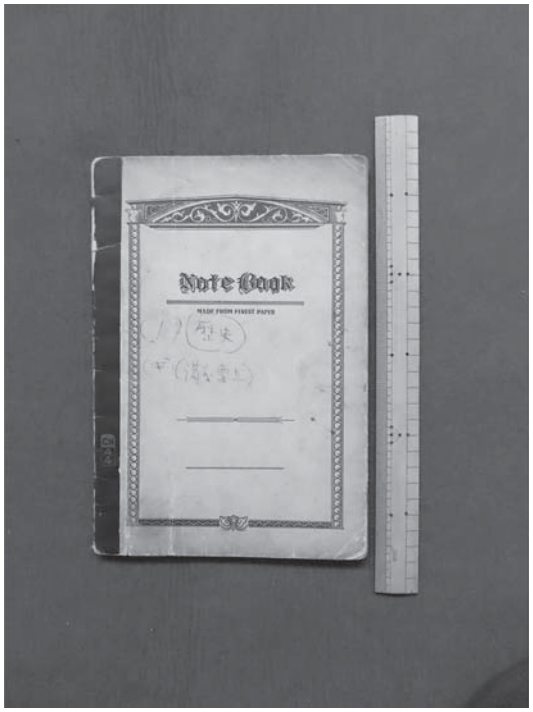

図1　原本ノート①（表紙表）

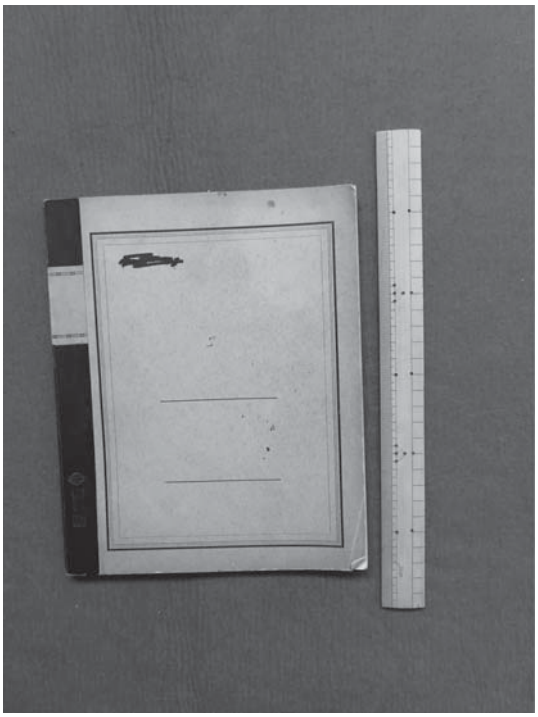

図2　原本ノート②（表紙表）

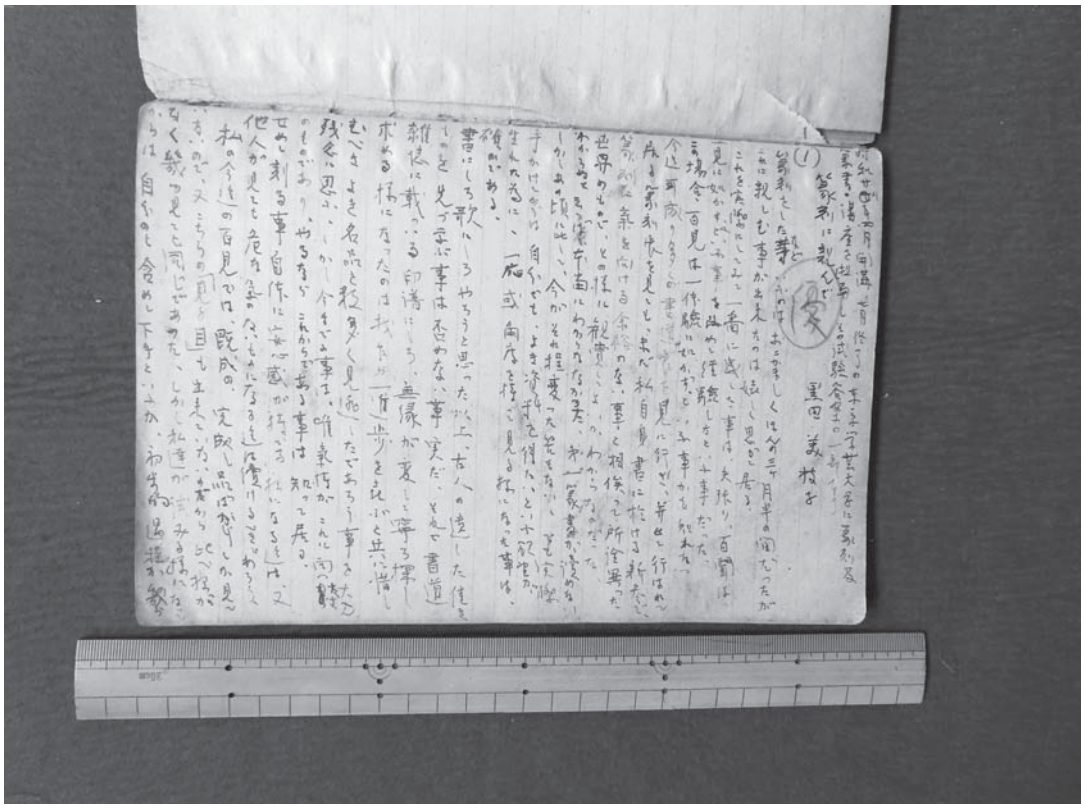

図3　原本ノート①（七一頁）

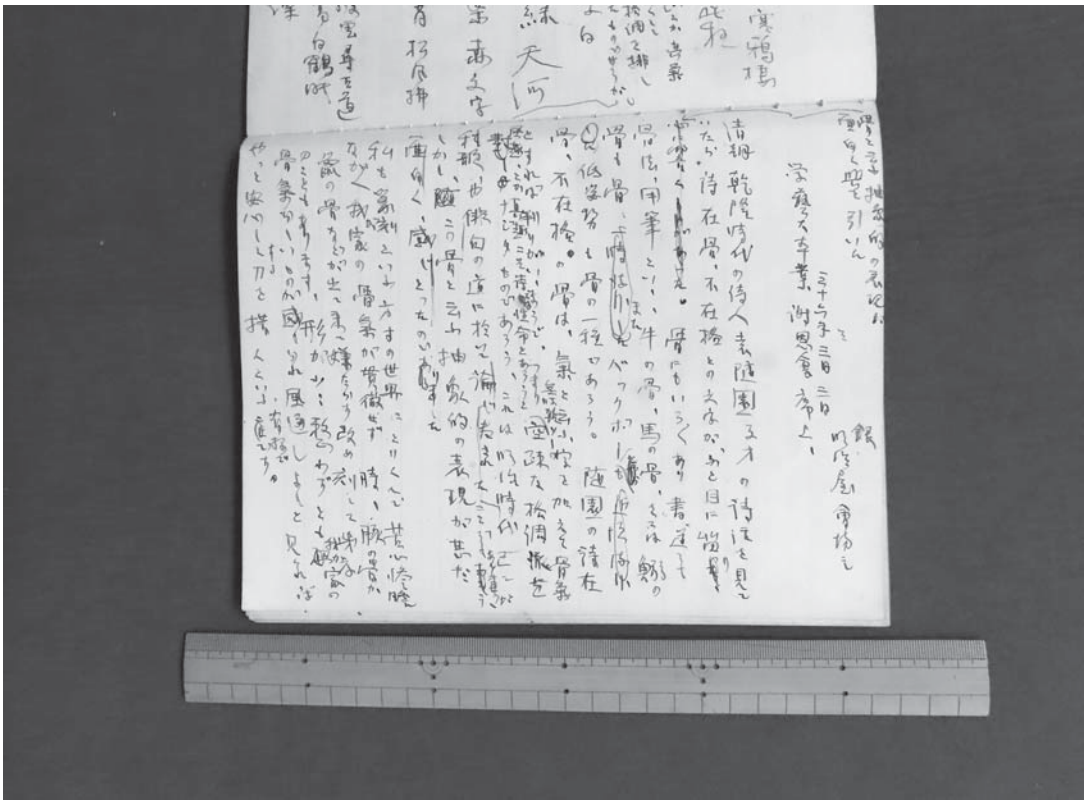

図4　原本ノート①（七二頁）（『篆刻講義ノート』八六・八七頁）
学芸大卒業謝恩会席上　昭和三十六年三月三日　銀座明治屋会場にて